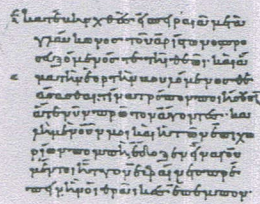


国家 (上)

プラトン 著

藤沢令夫 訳



ソクラテスは国家の名において処刑された。それを契機としてプラトン(前427-

前347)は、師が説きつづけた正義の徳の実現には人間の魂の在り方だけではなく国家そのものを原理的に問わねばならぬと考えるに至る。この課題の追求の末に提示されるのが、本書の中心テーゼをなす哲人統治の思想に他ならなかった。プラトン対話篇中の最高峰。(全2冊)



青 601-7
岩波文庫

(359) ことができるでしょう。すべて自然状態にあるものは、この欲心をこそ善きものとして追求するのが本来のあり方なのであって、ただそれが、法の力でむりやりに平等の尊重へと、わきへ逸らされているにすぎないのです。

D 私と言うような、何でもしたい放題の自由というのは、むかしリュディアの人ギュゲスの先祖(同名のギュゲスが)が授かったと伝えられるような力が、彼ら正しい人と不正な人にも与えられたと想像してみれば、いちばんよくわかるでしょう。

ギュゲスは、羊飼いとして当時のリュディア王に仕えていましたが、ある日のこと、大雨が降り地震が起って、大地の一部が裂け、羊たちに草を食わせていたあたりに、ぽっかりと穴があきました。彼はこれを見て驚き、その穴の中に入って行きました。物語によれば、彼はそこにいろいろと不思議なものがあるのを見つけましたが、なかでもとくに目についたのは、青銅でできた馬でした。これは、中が空洞になっていて、小さな窓がついていました。身をかがめてその窓からのぞきこんでみると、中には、人間並み以上の大きさの、屍体らしきものがあるのを見えました。それは、ほかには何も身に着けていませんでしたが、ただ指に黄金の指輪をはめていたので、彼はその指輪を抜き取って、穴の外に出てきたのです。

さて、羊飼いたちの恒例の集まりがあったときのことです。それは毎月羊たちの様子を王に報告するために行なわれるものですが、その集まりにギュゲスも例の指輪をはめて出席しました。彼はほかの羊飼いたちといっしょに坐っていました。そのときふと、指輪の玉受けを自

36分の目に見えなくなつて、彼らはギュゲスがどこかへ行ってしまったかのように、彼について話し合っているではありませんか。彼はびっくりして、もう一度指輪にさわりながら、その玉受けを外側に回してみました。回してみると、こんどは彼の姿が見えるようになったのです。

このことに気づいた彼は、その指輪がほんとうにそういう力をもっているかどうかを試してみましたが、結果は同じこと、玉受けを回して内側に向ければ、姿が見えなくなるし、外側に向けると、見えるようになるのです。

ギュゲスはこれを知ると、さっそく、王のもとへ報告に行く使者のひとりに自分が加わるようになり取り計らい、そこへ行つて、まず王の妃と通じたのち、妃と共謀して王を襲い、殺してしましました。そしてこのようにして、王権をわがものとしたのです。

さて、かりにこのような指輪が二つあったとして、その一つを正しい人が、他の一つを不正な人が、はめるとしてみましょう。それでもなお正義のうちにどまらな、あくまで他人のものに手をつけずに控えているほど、鋼鉄のように志操堅固な者など、ひとりもいまいと思われましよう。市場から何でも好きなものを、何おそれることもなく取ってくることもできるし、家に入りこんで、誰でも好きな者と交わることもできるし、これと違う人々を殺したり、縛めから解放したりすることもできるし、その他何ごとにつけても、人間たちのなかで神さまの

(360) ように振舞えるというのに! — こういう行為にかけては、正しい人することは、不正な人のすること何ら異なるところがなく、両者とも同じ事柄へ赴くことでしょう。

びとは言うでしょう、このことこそは、何びとも自発的に正しい人間である者はなく、強制とは本人にとつて個人的には善いものではない、動かぬ証拠ではないか。つまり、(正義が不正をはたらく)とができると思つた場合には、きつと不正をはたらくのだから、と。これすなわち、すべての人間は、(不正のほう)が個人的には(正義よりも)ずつと得になると考えているからにはかならないが、この考えは正しいのだと、この説の提唱者は主張するわけだ。事実、もし誰かが先のような何でもしたい放題の自由を掌中に収めていながら、何ひとつ悪事をなす気にならず、他人のものに手をつけることもしないとしたり、そこに気づいている人とお互いの面前では彼のことを賞讃するでしょうが、それは、自分が不正をはたらかれるのがこわさに、お互いを欺き合っているだけなのです。

— この点については、これくらいにしておきましょう。